

列王記上19章15～16、19～21節
ガラテヤの信徒への手紙第5章1、13～25節
ルカによる福音書第9章51～62節

本日の聖書日課は、新しい聖書日課になっても全く同じ箇所です。聖書本文は新共同訳から新しい聖書協会共同訳になっています。また、特祷は変わりました。

この聖書日課からご一緒に学ぶのも2回目となりました。3年前にお配りした原稿を見ますと、三つの箇所に共通したテーマは「召命です」と書いていました。その時は、旧約と福音書に注目して、なぜわたしたちは教会に集められているのか、そのことを聖書箇所から学びました。本日は、ガラテヤ書中心に、ことに「愛を持って互いに仕えなさい」（5：13）を中心に学びたいと思います。3年前は、「召命」をテーマにしましたので、この句についてあまり触れませんでした。

ガラテヤ書の5章は、イエス様を通して、信仰者に与えられる自由とは何か、またその自由から何を実践すべきかについて記しています。聖書日課では2節から12節が省略されていますが、そこでは「割礼」を題材にしつつ、律法という拘束力を持った何かによって歩むのではなく、信仰によって歩むことの大切さについて記しています。パウロは、その信仰による歩みを「自由へと召された」こととして、上記の「愛を持って互いに仕えなさい」（5：13）と勧めるのです。

パウロは、ことにプロテスタント教会において、律法による義ではなく、信仰による義、いわゆる信仰義認の神学に立つ人と言われることが多いです。また、このガラテヤ書はその根拠の一つと言われます。それはそれで間違いではありませんが、パウロは単純な二者択一的な事柄として信仰をとらえているわけではありません。パウロがイエス様を通じた信仰から見出した事柄は、律法を実践して得られる希望を、愛の実践を伴う信仰によって待ち望むことです。律法を通じた希望とは、天地を創造された主なる神様が与えられた律法を実践して、イスラエルがこの世界で光の子となる時、その姿から世界全体が主なる神様を知り、平和へとつながる歩みが見えてくるということです。それはパウロの時代も（現代でも）有効な事柄なのです。しかし、パウロはイエス様を通して、教会が愛を持って仕えあうことを通して、その希望がより豊かになることを示されたのです。なぜ、より豊かといえるのか、それはその歩みが、イスラエルをこえて、すべての人がその歩みに参加できるからです。

パウロは、そうであるが故に「**きょうだいたち、あなたがたは自由へと召されたのです。ただ、この自由を、肉を満足させる機会とせず**」（5：13）と、律法からの自由を、肉に罪を犯させる機会ではなく、愛へと向かう機会であると語り、最初に触れた「**愛を持って互いに仕えなさい**」（5：13）と語ります。イエス様を通して与えられる自由とは、単なる束縛からの解放ではなく、主なる神様の愛と不可分であるからです。パウロはその愛について、「**なぜなら律法全体**

が、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句において全うされているからです」とまとめます。この「隣人を自分のように愛する」は、律法の中でも大変有名な個所（レビ 19：18）です。また、主なる神様への愛について触れていませんが、『聖書』あるいは『聖書』に基づく愛は、主なる神様を愛することが大前提ですので、イエス様が教えられた通り（マルコ 12：28-34 など）、主なる神様と隣人を愛することが、パウロにとっても基本的事柄です。それは教会の倫理といってもよいのですが、倫理という表現は、先に見た律法のような拘束力を持つ歩み方のように思えます。それは倫理という言葉のとらえ方にもよりますが、パウロは、そのようにならないように、「私は言います。霊によって歩みなさい」（5：16）と勧めるのです。

パウロは 19 節以下で、「肉の行い」（直訳：肉の業）と「霊の結ぶ実」（直訳：霊の実）という比較をします。ことに肉の「行い」に対して、愛の「行い」ではなく、「実」としている点が、大切です。ある意味で、苦肉の策とも言える表現かもしれません。「愛するとは何か」、それを細かく規定して拘束力を持たせてしまっただけでは、律法と同じになってしまうからです。それは、主なる神様の愛に応え、またその愛に基づいて、教会を通して隣人を愛そうとする時、一人ひとりが、自由にかつ自発的に実践する事柄であるからです。また、「実」であるからこそ、何を行うべきかが大切なのではなく、何が結果として起こったかが大切だということです。言い方を変えれば、パウロは、愛においては、結果が重要だと示しているのです。本来ならば、律法も同じなのですが、律法は人間の解釈次第で、結果ではなく条件を満たしたか否かで、その達成が終結する場合があります。しかし、主なる神様の愛は、そうではありません。パウロは、その愛に基づく歩みの、広さと深さを示すために、「実」という言葉で表現するのです。

パウロのこの表現は、素晴らしいことを示していると同時に、その達成の困難さを示しています。信仰者の示す愛、教会の示す愛、それを結果で判断してくださいというのは何とも困難な課題です。パウロが列挙しているような「淫行、汚れ、放蕩、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、嫉妬、怒り、利己心、分裂、分派、妬み、泥酔、馬鹿騒ぎ、その他このたぐいのもの」、これららがすべて二千年の教会の歩みにあったとは思えませんが、いくつかはあったでしょう。他方「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」が、すべて具体化されてきたかということそうではありません。教会はまだ、イエス様から出された宿題を終えていない、まさにそう言える根拠が、ここに示されているのです。

3年前、同じ聖書日課で学んだ年の2月24日に、伝統的に最も古い教会が関わる人々同士の戦いが始まっていました。その戦いは今も続き、それ以後も他の地域で新たな戦いも起こり、世界中で戦いの準備が始まりつつあります。戦いだけではなく、様々な混乱が世界各地で起こっています。自然災害や様々な不安もあり、この先に希望があるのかと思えてしまいます。しかし、パウロはそのような混乱と不安があるからこそ、イスラエルのみが実践する律法ではなく、イエス様を通した信仰によって集められる教会の愛の実践に、希望を見出したのです。その希望は今も変わりません。イエス様の復活が、その希望の根拠であるからです。私たち一人ひとり、その希望に励まされたいと思います。そして、希望を示す歩みを続けたいと思います。